

訂正

『東アジア文化交渉研究 第14号』（2021年3月31日刊行）の掲載論文、「魯迅作品『故郷』の翻訳状況：増田渉の直筆注釈メモをめぐって」（233頁から247頁）において、先行研究の出典の記載漏れに該当する部分がありました。下記に訂正してお詫び申し上げます。

訂正箇所 (頁/行)	追加
234/20～235/1	原文：「『呐喊』に収録された『故郷』は、……作品である。」 出典：李雪、「佐藤春夫と周氏兄弟の『相互翻訳』」（『文学研究論集』、2013年2月）。
235/2～235/5	原文：「著名な作家である佐藤春夫……広く知られるようになった。」 出典：尚曉嵐、「日本人から見た魯迅」（人民網日本語版、2016年10月21日）。
244/9～244/14	原文：「『知事』という言葉は、……知行がある。」 出典：URL： https://ja.wikipedia.org/wiki/知事
246/13～246/14	原文：「訳者がこだわりを見せる言葉や表現を探し、その言葉や表現にこだわるのはなぜなのか、ということを追究していかなければならない。」 出典：田中綾子、「翻訳文学における新たな授業づくりの方法と実践—『故郷』（魯迅）の訳文比較をとおして—」（『教育実践研究第29集』、2019年）。

魯迅作品「故郷」の翻訳状況

——増田渉の直筆注釈メモをめぐって

東 延 欣

The Translation of Lu Xun's most famous work “*Guxiang*” in Japan

—— focus on Wataru Masuda's Manuscript

DONG Yanxin

For a long time, Lu Xun's work has been influential in Japan. It is still debatable whether each Japanese translation of Lu Xun's works is faithful to the author Lu Xun's will.

This essay researches into Wataru Masuda, one of the students of Lu Xun whose handwriting notes in *Guxiang*, which collected in the Masuda Library of Kansai University Library, Japan. While referring to these notes, examine the Japanese translation status of Lu Xun's work *Guxiang* recorded in Japanese textbooks.

Based on the memo of Masuda who took Lu Xun's private lecture, it was possible to find a more objective translation format after clearly judging whether each typical Japanese translation was mistranslated or inappropriate or not. The significance of improving the Japanese translation of Lu Xun's work can be reconsidered too.

Keywords: Lu Xun, Masuda Wataru, ‘*Guxiang*’, Historical Materials, Translation

キーワード：魯迅、増田渉、「故郷」、翻訳

はじめに

1931（昭和6）年、増田渉は上海で魯迅と出会い、魯迅宅で個人指導を受けており、増田渉は魯迅とより近い距離で交流することができた。本論が使用する『呐喊』の1930（昭和5）年刊烏合叢書版には、注釈の書き込みがあり、これは魯迅から親しく講義をうけた時のものと推定され、増田が翻訳に使用した底本にもなった。増田渉の直筆メモ、いわば魯迅本人から受けた直接的な日本語の説明を分析することによって、魯迅の作品の中で難読な部分をよりの確に理解できるだろう。また、「故郷」は、いわゆる日本の国語教科書に収録された翻訳文学の「定番」だが、だからこそより客観的な翻訳の形式を見出すことができるだろう。

一 増田渉と魯迅

増田渉は東京帝国大学在籍中に、当時中国小説の研究者として有名であった塩谷温教授の授業を聴くうちに、魯迅の名前を覚えた。1929（昭和4）年、増田は大学卒業後、しばらく佐藤春夫の手伝いをし、中国の小説の翻訳などをしたことがある。「増田は長篇の『平妖伝』の翻訳に一応のメドがついたことを契機として、中国に遊学することを思い立ったようである。」¹⁾ そのきっかけで増田は仕切りに中国に行ってみたくと思った。そして、1931（昭和6）年3月に佐藤春夫に書いてもらった「紹介状」を持って、上海に遊学することにした。その後、増田は上海で内山完造の紹介によって晩年の魯迅と知り合い、以後数ヶ月にわたって魯迅宅で魯迅から直接の講義を受け²⁾、同年12月に帰国した。当時は、魯迅の『中国小説史略』、『呐喊』、『彷徨』などを教科書として使っていたことから、これらの本には多くのメモが残されている。1932（昭和7）年、帰国後の増田は『中国小説史略』の翻訳に没頭し、翻訳の過程で不明なところについて、魯迅との書簡の往復が始まった。その間に、1933（昭和8）年、「中国文学研究会」を結成したことがきっかけで、竹内好、松枝茂夫など中国文学研究者と知り合った。1935（昭和10）年に、佐藤春夫と共訳した『魯迅選集』は岩波書店から出版された。同年の7月、3年間かけて翻訳した『中国小説史略』の日本語訳をサイレン出版社から出版された。魯迅との書簡の往復は魯迅の逝去まで続いて、書簡で魯迅の健康がよくないことを知った増田は、1936（昭和11）年の7月、お見舞のため久しぶりに上海を再訪した。同年10月19日、魯迅の病状は急に悪化し、この世を去った。

二 日本における「故郷」の翻訳状況

1 「故郷」の翻訳史

1921（大正10）年5月『新青年』に発表され、のちに1923（大正12）年8月に北京の新潮社より刊行された魯迅の最初の創作集『呐喊』に収録された「故郷」は、後に日本の国語の教科書などにも採用され、魯迅の作品の中でも、日本の読者にもっとも親しまれている作品となった。魯迅の代表作ともいえる短編小説で、この作品に描かれた主人公の生家の没落、故郷からの退去は、魯迅本人の経験がもととなっていると言われる。当時の社会に残存する封建的な思想と習慣に対する慨嘆とともに、次代への希

1) 井上泰山「増田渉と辛島驍：『中国小説史略』の翻訳をめぐる」（『関西大学東西学術研究所紀要』 第45巻 2012年4月）。

2) 増田渉は『魯迅の印象』に、魯迅の個人講義を受けた際の様子について、詳しく記録していた。

原文：それから彼のテーブルに二人並んで腰かけ、私が小説史の原文を逐字的に日本語にして読む、読みにくいところは教えてもらう、そして字句なり内容なりについて不審のところは徹底的に質問する。その答えが、字句の解釈なら簡単であるが、内容となるといろいろの説明があるので相当時間がかかる。たいてい午後の二時あるいは三時ごろからはじめて夕方五時から六時ごろまでつづけた。むろんいつしか雑談にわたったり、日々生起する時事に対する意見や批評をきいたりする合の手がはいることも多かったが、およそ三か月はその本一冊の講読に費やされたと思う。…それから『呐喊』と『彷徨』との二小説集の講解も終わったのがその年の暮れであった。私はだからその一年、春夏秋冬、毎日彼の書齋に通ったわけである。そして一日、三時間くらい彼の個人教授をうけたことになる。（増田渉『魯迅の印象』（角川書店 1970年）16-18頁。）

望と決意が込められている作品である。

1932（昭和7）年、著名な作家である佐藤春夫が訳した魯迅の短編小説「故郷」が雑誌「中央公論」に掲載された。当時、日本では翻訳された魯迅の作品が大人気だったため、魯迅が亡くなって1年もしないうちに、改造社が「大魯迅全集」（全7巻）を出版した。中国で初の「魯迅全集」が出版される1年も前のことだ。第二次世界大戦後、中国文学者である竹内好などが翻訳と研究を進め、魯迅はさらに広く知られるようになった。今まで、魯迅の「故郷」を収録した出版物は実際に62冊である³⁾。50年代初めから今に至るまで、魯迅の「故郷」は日本の国語の教科書に採用され続けている。つまり、中学校・高校に通った日本人は、誰でも魯迅の作品を読んだことがあると認められる。日本人は魯迅の作品を通して中国の姿を見て、中国に対するイメージを浮かべる。

筆者の調査によって、増田渉の生没年を基準として、1903（明治36）年から1977（昭和52）年まで、日本における「故郷」の翻訳版本を次の表のように整理した。

表1 増田渉と同時期の各訳本

	日付	訳者	出版社
1	1927年10月	訳者不明	雑誌『大調和』第1巻7号 春秋社
2	1932年1月	佐藤春夫	雑誌『中央公論』第47巻第1号 中央公論社
3	1932年11月	井上紅梅	『魯迅全集』改造社
4	1935年6月	佐藤春夫	『魯迅選集』岩波文庫 岩波書店
5	1937年2月	佐藤春夫	『大魯迅全集』第1巻 改造社
6	1953年5月	竹内好	『魯迅作品集』筑摩書房
7	1953年9月	竹内好	『キング』第29巻第11号 大日本雄弁会講談社
8	1953年10月	田中清一郎	『魯迅選集 創作集1』青木文庫145 青木書店
9	1954年2月	竹内好	『現代中国文学全集』第1巻 河出書房
10	1955年11月	竹内好	『阿Q正伝 狂人日記、他十二篇』岩波文庫 岩波書店
11	1956年6月	竹内好	『魯迅選集』第1巻 作品1 岩波書店
12	1956年9月	竹内好	『現代世界文学全集42』新潮社
13	1958年7月	竹内好	『世界文学大系62』筑摩書房
14	1960年4月	増田渉	『世界名作全集33』平凡社
15	1961年4月	増田渉	『阿Q正伝 他八篇』角川書店
16	1962年2月	竹内好	『世界文学全集（グリーン版）47』河出書房新社
17	1963年6月	佐藤一郎	『世界短篇文学全集15』中国文学 集英社
18	1963年9月	田中清一郎	『阿Q正伝 狂人日記 他14篇』青木文庫145 青木書店
19	1964年2月	竹内好	『魯迅選集』第1巻作品1 岩波書店
20	1966年3月	竹内好	『世界文学全集19』河出書房新社
21	1966年8月	竹内好	『魯迅作品集1』筑摩叢書64 筑摩書房
22	1967年6月	高橋和巳	『世界の文学』第47巻魯迅 中央公論社
23	1968年11月	佐藤春夫	『佐藤春夫全集9』講談社
24	1969年3月	竹内好	『世界文学全集（カラー版35）』河出書房新社
25	1970年3月	松枝茂夫	『阿Q正伝・狂人日記 他14篇』旺文文庫 旺文社

3) 李艶「日本における『故郷』翻訳史」(全国大学国語教育学会国語科教育研究『大会研究発表要旨集』2013年) 153-156頁。

26	1970年6月	竹内好	『現代中国文学1 魯迅』河出書房新社
27	1972年1月	田中清一郎	『阿Q正伝 狂人日記』潮文庫 潮出版社
28	1973年6月	高橋和巳	『呐喊(阿Q正伝・狂人日記)』中公文庫 中央公論社
29	1974年8月	駒田信二	『世界文学全集33』(全45巻)愛蔵版 集英社
30	1975年6月	松枝茂夫・ 和田武司	『世界文学全集93』講談社
31	1975年11月	丸山昇	『阿Q正伝 他九篇』新日本文庫 新日本出版社
32	1976年10月	竹内好	『魯迅文集』第一巻 筑摩書房

2 研究対象

本稿は増田渉訳を中心に、研究対象としての出版物の種類は「大人向け完訳」で、増田渉の没年である1977(昭和52)年までの「故郷」の版本である。出版された増田訳「故郷」の版本は2つある。1つは1960(昭和35)年4月、平凡社から出版した『世界名作全集33』に収録された版本であり、もう1つは1961(昭和36)年4月、角川書店から出版した『阿Q正伝 他八篇』に収録された版本である。2つの版本とも「大人向け完訳」で、いわゆる主に大人を読者対象として想定し、全文を翻訳したものである。

前述の通り、1927(昭和2)年から、1977(昭和52)年増田渉の逝去まで日本における「故郷」の翻訳出版物は非常に多く、32冊に及ぶ。その中で、初めて日本語に翻訳されたのは、1927(昭和2)年10月、武者小路実篤が編集する雑誌『大調和』第1巻第7号に掲載された訳文である。この訳文には訳者の名前が記載されていないため、訳者については身元や背景も未詳である。二番目の訳文は、佐藤春夫が英訳を参考して、日本の代表的な総合雑誌『中央公論』に発表されたものである。すでに作家として日本で知名度が高かった佐藤春夫の訳本は、日本の文化界に魯迅の名を紹介した。三番目は魯迅から酷評を受けた井上紅梅訳である。1937(昭和12)年2月、佐藤春夫訳を収録した『大魯迅全集』が改造社から出版されてから、竹内好訳の登場まで、12年の空白がある。竹内好は「だんだん戦争が激しくなっていて、それどころじゃなくなってしまう…占領軍が中国とソビエトのものは出版しちゃいかんという政策をとりまして出版できなくなりました。」⁴⁾と語った。1951(昭和26)年9月、サンフランシスコ条約が締結し、翌年5月、竹内好訳「故郷」が筑摩書房から発表された。現在、日本の国語教科書では、1976(昭和51)年10月に筑摩書房から出版された竹内好訳『魯迅文集(第一巻)』収録の「故郷」訳文が底本として用いられている。この版本を竹内好の新訳とし、それ以前の竹内好訳を旧訳とする。

本稿は、増田渉の直筆メモにある内容を参考し、以上の版本の中の影響力を持つ訳者不明訳、佐藤訳、井上訳、竹内訳、及び中国文学者として著名な松枝訳と高橋訳に注目しながら、日本で一番知られていると認められる魯迅の作品「故郷」の翻訳状況を明確にし、増田渉訳の特徴や意義を明らかにする。また、各訳本は誤訳、あるいは適当ではないところがあるか否か明確には判断できないが、魯迅の個人講義を受けた増田のメモによって、より客観的な翻訳の形式を見出すことができ、教科書として広く知られる「故郷」の日本語訳の改善について検討する。

4) 竹内好「日本における魯迅の翻訳」(『魯迅と30年代の中国文学』岩波書店 1976年4月)401-420頁。

三 呼称の翻訳問題

呼称語は、普通は呼称される相手との関係を指示する以外に、相手の性別、年齢と年長者あるいは目上の人への尊敬などを表す意味機能もある。「故郷」の中で、登場人物に対する呼称は当時の人の社会的地位や社会の問題を現している。

1 「哥」と「哥兒」

「故郷」の中に、微妙な違いがある呼称「哥」と「哥兒」がある。林敏潔と藤井省三は「竹内没有如此區別“哥”与“哥儿”，旧譯版与修訂版都翻譯成“閏ちゃん（阿閏）”“迅ちゃん（阿迅）”。」⁵⁾という問題を提出した。

「故郷」の中の主人公「私」は年上である閏土を「閏土哥」と呼んでいる。「哥」の意味は、年上の兄弟、お兄さんのことである。「閏土哥」と呼んで、2人の中の年齢関係を「私」は少年時代の親友としての閏土に示すだけでなく、一方では昔の閏土から、ただ中庭の内で四角の天を見ているだけの「私」が知らなかった世界を教えてもらったので、社会的地位と関係なく、閏土に尊敬しながら親しい気持ちもあることを閏土に表現している。「私」は少年時代から、大人になってまた故郷に帰った時にも、閏土のことを自分と平等な友達として扱っている。

また、魯迅の「故郷」の中に「哥兒」という呼称は、「お坊ちゃん」という意味である。他人の息子や主家の息子を敬っていう、あるいは、世事に通じない男、世間知らずの男をいう呼称である。「豆腐屋小町」という楊二嫂は「私」のことを「迅哥兒」と呼んで、2人の出身や社会的地位の違いを示している。一方、相手は金持ちだから、楊二嫂はうまい汁を吸おうと考えていて、勝手に他の人のものを持ち帰りたい気持ちが表現されている。そして、「私」のお母さんの話によって、昔の閏土は「私」のことを「迅哥兒」と呼んでいたが、20年後再会する際に、「私」に対する呼称は「老爺」に変更された。それ故、「故郷」の中の「哥兒」は年齢と関係なく、ただ登場人物の関係と社会的地位の違いを示すために用いられており、「哥」という呼称と全く異なる意味を持つことがわかる。

増田渉の直筆注釈メモによって、原文「啊！閏土哥，——你来了？……」の「哥」のところに、「兄」と「さん」という解釈が書かれている（図1）。

5) 林敏潔、藤井省三「魯迅文学日語翻譯思考—以竹内好的『呐喊』為中心」（『華東師範大學學報』哲学社会科学版 2018年第1期）。

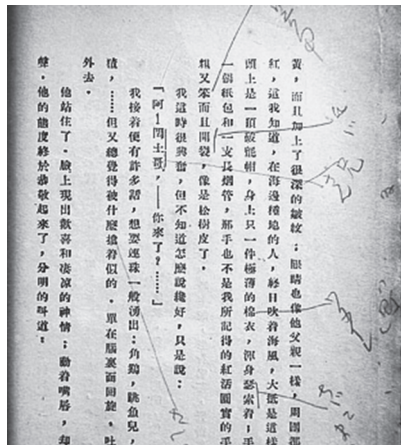


図1

本来、増田渉にとって、中国語の「哥」は難しくない言葉で、ここに注釈を書く必要はないはずである。わざとメモを書いた理由は、魯迅はこの「哥」について、増田に「兄」と「さん」の意味であることを強調したと推測される。原作者としての魯迅はこの部分の「哥」は本当の意味の兄であり、日本語では「さん」を付けることを認めている。

そして、楊二嫂が「私」のことを「迅哥兒」と呼ぶ原文「迅哥兒，你鬧了」の「哥兒」のところに、「ちゃん」という注釈メモが残っている（図2）。

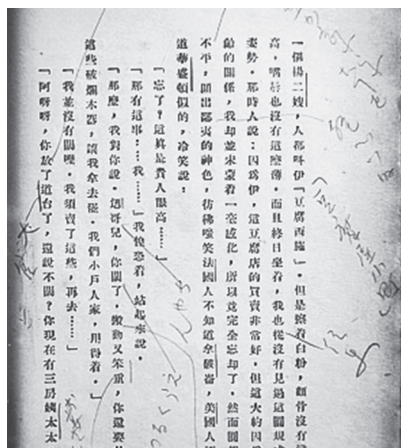


図2

魯迅の個人授業を受けた増田渉の直筆メモから見ると、この「哥兒」に最も近い日本語の呼び方は「ちゃん」であることは、原作者の魯迅本人が認めている。つまり、魯迅は「故郷」の中で、「哥」と「哥兒」2つの呼称を使って、表現したいことは区別している。まさに魯迅は夏目漱石の「坊ちゃん」を「哥兒」に翻訳したように、魯迅の考えでは、「哥兒」は「哥」と違って、相手の年齢を表す機能の呼称ではなく、出身や社会的地位を表す「坊ちゃん」という意味であった。また、「故郷」に残っている増田渉の直筆注釈メモによって、原文「那時我的父親還在世，家景也好，我正是一個少爺。」のところに、増田は「少爺」を「坊ちゃん」に解釈している。つまり、「少爺」は「坊ちゃん」という意味であることを

魯迅が認めているにもかかわらず、魯迅は夏目漱石の「坊ちゃん」を「哥児」に翻訳した。ということは、普通の「哥」と異なり、「哥児」は「少爺」と同じ意味で、人の出身と社会的地位を表現できる呼称であると魯迅本人が認めているということになる。

2 増田渉直筆メモによる各訳の分析

次は、「閩土哥」と「迅哥児」の翻訳について、各訳を対照する。

閩土哥：

【原文】啊！閩土哥，——你来了？……

【訳者不明訳】あ！閩土さん、来たね？……（雑誌『大調和』第1巻7号 春秋社 1927年）

【増田訳】あ！閩土さん、——いらっしゃい……（『阿Q正伝』角川文庫 1961年）

【井上訳】あ、閩土さん、よく来てくれた（『魯迅全集』改造社 1932年）

【佐藤訳】や、閩さんか。——よく来たな……（『魯迅選集』岩波文庫 岩波書店 1935年）

【竹内訳】ああ、閩ちゃん——よく来たね……。『魯迅選集』第1巻 作品1 岩波書店 1956年）

【松枝訳】おお、閩ちゃん……よく来たね……。『阿Q正伝・狂人日記 他14篇』旺文文庫 旺文社 1970年）

【高橋訳】あ！閩ちゃん、来たね？……（『世界の文学』第47巻魯迅 中央公論社 1967年）

迅哥児：

【原文】那麼，我對你說。迅哥児，你闊了…

【訳者不明訳】あんなことを、わたしお話があるんですがねえ。迅さん、あなたもうすっかり成金でせう、…（雑誌『大調和』第1巻7号 春秋社 1927年）

【増田訳】では、私はあなたに申しあげます。迅ちゃん、あなたはエラクおなりだし…（『阿Q正伝』角川文庫 1961年）

【井上訳】そうなら迅ちゃん、お前さんにいうがね。お前は金持ちになったんだから…（『魯迅全集』改造社 1932年）

【佐藤訳】それでは、願ひがありますが、迅ちゃん、お前さん大へんエラクおなりだつてね。（『魯迅選集』岩波文庫 岩波書店 1935年）

【竹内訳】それならね、おききなさいよ、迅ちゃん。あんた、金持ちになったんでしょ。（『魯迅選集』第1巻 作品1 岩波書店 1956年）

【松枝訳】じゃね、いうわ。迅ちゃん。あなたは金持ちだし、…（『阿Q正伝・狂人日記 他14篇』旺文文庫 旺文社 1970年）

【高橋訳】そんなら、あなたに申しますわ。迅さん、あなたはお金持ちになられて、…（『世界の文学』第47巻魯迅 中央公論社 1967年）

以上の各訳から見ると、訳者不明、増田、井上、佐藤は「閩土哥」を「閩土さん」、「閩さん」に翻訳して、閩土に「さん」を付けている。竹内訳、松枝訳、高橋訳は「閩ちゃん」となっている。「迅哥児」に関する翻訳は、訳者不明訳と高橋訳では「迅さん」、他の各訳とも「迅ちゃん」となっている。増田

訳、井上訳、佐藤訳は「哥」と「哥児」を日本語で「さん」と「ちゃん」で区別して、高橋は逆にして、「哥」と「哥児」を「ちゃん」と「さん」に翻訳している。そして、訳者不明訳は一律に「さん」となって、竹内訳や松枝訳は一律に「ちゃん」となっている。

増田渉と魯迅の直筆注釈メモによって、原作である魯迅はこの2つの呼称を区別して、「哥」は「さん」、「哥児」は「ちゃん」ということを認め、違う意味を表現しようとしている。そのため、この「哥」と「哥児」の翻訳だけから見ると、増田訳、井上訳、佐藤訳はそれ以外の訳より適切だと考えられる。ちなみに、佐藤訳の「故郷」は最初に1932年の『中央公論』で発表したことがあって、その版本は「哥」と「哥児」を区別しておらず、「ちゃん」と翻訳している。その後、増田渉と共訳の岩波書店の文庫本『魯迅選集』の出版を促したことがあるため、増田渉に中央公論版の「故郷」は「改めるべき箇所を指摘」⁶⁾してもらった。佐藤訳は英訳を参考しながら翻訳したので、1932年版は誤訳があり、1935年岩波文庫の『魯迅選集』に収録された際、増田の指摘によって1932年版の脱落と誤訳の部分を修正した⁷⁾。それ故、佐藤訳と増田訳との共通点が多いことがわかる。

中国文学研究者である藤井省三は、「アメリカの翻訳理論家のロレンス・ヴェヌティが翻訳を外国語・外国文化の土着化、本土化を意味する domestication と土着文化・本土文化の外国化を意味する foreignization の両面から分析していることをふまえ、竹内好の翻訳は魯迅を過度に『土着化、本土化』している。」と魯迅の竹内好訳の訳文をかなりしつこく批判している。確かに、一般の読者としては、「翻訳作品」に対し、「読みやすい」「近づきやすい」のイメージがあればもっと興味を持つことができるということで、出版社もそういうイメージで売ろうとしている。そのため、外国の文学作品は「土着化、本土化」しないと、広く知られる可能性も低くなる。

竹内訳や松枝訳が「哥」と「哥児」を区別していない理由は当時の社会環境に影響を受けた可能性がある。戦後の日本は連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）の指揮の下、日本政府によって農地の所有制度の改革を行われて、地主制度を解体し、日本農民を奴隷化してきた経済的桎梏を打破した。当時の農地改革は成功して、日本社会の進歩、民主的な権利の獲得、経済の近代化に積極的な役割を果たしたと言える。そのため、当時の人々の社会的地位は変わって、平等の社会になり始めた。「哥」と「哥児」についての翻訳によって、上述の例のように、1947（昭和22）年前の翻訳は登場人物の社会地位を表わす呼称を区別している。竹内訳や松枝訳は、当時の日本社会の発展に応じて「土着化、本土化」の翻訳を行ったつもりだろう。しかし、原作にある「哥」と「哥児」は異なる意味を表現していることは事実である。社会の変化に従って行われた「土着化、本土化」だと言われても、「哥」と「哥児」を区別しないまま翻訳することは、恐らく誤訳だと言えるだろう。

魯迅の文体は屈折した長文による迷路のような思考表現を特徴とすると認められるので、ある程度の意識というものは必要である。竹内訳は魯迅の作品を本土化して、全ての日本国語教科書に収録されるまでになり、魯迅の作品を広めた。しかし、読者が小説の内容をきちんと理解でき、さらに原作の意思

6) 佐藤春夫「あとがき」(『魯迅選集』岩波書店 1935年)。

7) 曲嵐「佐藤春夫の翻訳方法の一考察——魯迅著「故郷」について——」(『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』第48号 2019年12月)。

を忠実に表現することも大事である。増田渉と魯迅の直筆注釈メモによると、「哥」と「哥兒」は明らかに意味が違う呼称であるので、この2つの呼称についてより客観的な翻訳の形式を見出した。「哥」と「哥兒」についての翻訳のように、魯迅本人の意志に従って、真の魯迅像を忠実に再現することは、魯迅作品の日本語訳の改善に対する意義がある。

四 難解な言葉について各訳の問題

翻訳とは、起点言語（source language、原言語）による文章を、別の目標言語（target language、目的言語）による文章に変換する行為をさす。翻訳にとって、最も難しい問題の一つは、目標言語の中に起点言語と対等する言葉の存在がないことである。「故郷」の中にその時代しか使わない言葉、或いは魯迅の個人の習慣で本人のみが使う言葉が存在しており、それらの難解な言葉は、原作の時代の特質と魯迅の個人的な特徴を再現している。複数の訳文を読み比べ、このような難解な言葉や表現に着目しながら、増田渉と魯迅の直筆注釈メモを参考した上、各訳の差異を検討し、原作である魯迅の意志により近い翻訳を究明していく。

例1：「獠」

【原文】 向一匹獠盡力的刺去

【訳者不明訳】 一匹の獠（けもの名）をめがけて力の限り刺さうとしてゐる、（雑誌『大調和』第1巻7号 春秋社 1927年）

【増田訳】 一匹の獠（チャー スイカを食にくる獣の名 だが、実は想像上の動物）に向って懸命に突き刺す、（『阿Q正伝』角川文庫 1961年）

【井上訳】 一疋の土竜に向って力任せに突き刺す、（『魯迅全集』改造社 1932年）

【佐藤訳】 一疋の獠（チャー スイカを食ひに来るといふ獣、空想上の獣で、獠の字は作者の造字）を目がけて精一杯で刺さう。（『魯迅選集』岩波文庫 岩波書店 1935年）

【竹内訳】 一匹の「獠」を目がけて、ヤッと突く。（『魯迅選集』第1巻 作品1 岩波書店 1956年）

【松枝訳】 一匹のチャー [マミ（あなぐまのこと）やタヌキの類であろう] にむかってえいっとつく。（『阿Q正伝・狂人日記 他14篇』旺文文庫 旺文社 1970年）

【高橋訳】 一匹の獠を力まかせにつきさす。（『世界の文学』第47巻魯迅 中央公論社 1967年）

例1に、中国語原文で「獠」となっている言葉を取り上げる。訳者不明訳、増田訳、佐藤訳、竹内訳、高橋訳では魯迅の造った字「獠」をそのまま使って、訳者不明訳、増田訳と佐藤訳は訳注を入れて説明している。井上訳の「土竜」は、読者にとってわかりやすいが、原作の意志を読者に伝えず違うものに訳したので、誤訳とも言えるだろう。松枝訳は「獠」の発音で「チャー」と訳し、訳注を入れたが、魯迅がわざわざ特別に作った漢字を使わないので、読者を主人公と同じ心情にさせることができなくなった。

魯迅本人の解釈も言葉が足りなくて、一体どんな動物かつかめない。「我那時候并不知道所謂的獠是怎样一种動物——直到現在也没有知道——只是无端觉得状如小狗而凶猛。（私は当時、いわゆる獠はどのよ

うな動物かわからなかった——現在までもわからない——ただ見た目は子犬のようで、凶暴であるものだと思っている。』⁸⁾そして、1929（昭和4）年5月4日、魯迅が当時の中華書局に勤め、『辞海』の編集長であった舒新城に宛てた書簡に、「獠字是我据乡下人所说的声音，生造出来的，读如查。但我自己也不知道究竟是怎样的动物，因为这乃閩土所说，别人不知其详。现在想来，也许是獯。 (獠という文字は田舎の人々の発音による私が作った文字で、読み方は査と同じ。しかし、一体どのような動物か私でもわからない。閩土が言ったものだから、他の人は詳しくなかった。今考えてみると、もしかしたら獯というものかもしれない。』⁹⁾とある。

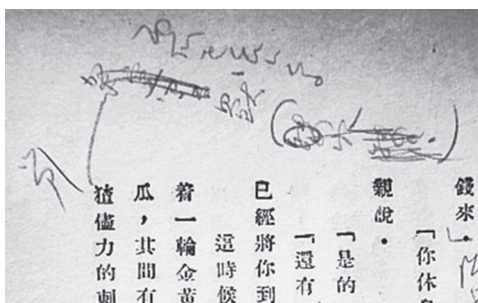


図3

図3のように、増田渉と魯迅の直筆注釈メモには、「獠」の隣に「ツア 架空的な西瓜をくひにくる獣」という注釈が書いてある。「獠」は「私」が閩土に憧れていた少年時代の思い出の場面に出てくる「架空的な西瓜を食いに来る獣」である。魯迅の説明によって、「獠」の正体は明らかになってないし、この漢字自体も魯迅の造字で、記憶の中の美しい故郷の象徴だから、他の動物では代わりにならない、魯迅にとって特別な存在である。

起点言語の難解な言葉について、一番適当な翻訳はどうなるのか、今までも以下のような議論がある。

「同化」であれば、翻訳者独自の文体でTL（母国語）では異国性を消すことができる。その結果、翻訳者自身による国民文学を形成できる。この経緯には読者による批評の後ろ楯と、人口に膾炙することが必要である。「異国化」であれば、異文化の脈拍や息づかいを伝えることが先決問題となり、外国文学としてのジャンルに収まり、翻訳者が色濃く出て来る。¹⁰⁾

増田渉と魯迅の注釈メモの存在がある場合、この「獠」の翻訳状況を見ると、架空の物だから、他の動物に翻訳すると、読者にとって理解しやすいかもしれないが、原作の表現したいことが失われてしまうだろう。この「獠」の翻訳は、原作者本人の意志を尊重した上で、読者が理解しやすいように、訳注

8) 魯迅『呐喊・故郷』（『魯迅全集』第一冊 人民文学出版社 2005）504頁。

9) 魯迅『致舒新城』（『魯迅全集』第十二冊 人民文学出版社 2005）162、163頁。

10) 宮崎充保「翻訳者の透明性と翻訳の等価性——『かわうそ』英訳の理論と実践——」（『山口大学工学部研究報告』1988年10月）147-163頁。

を入れる形が最も適当な方法だと考えられるだろう。

例2：放了道台

【原文】你放了道台了，還說不闊？

【訳者不明訳】おやまあまあ、あなたはお屋敷をおうりなすつたんでせう。だのにお金もちぢやないつておっしゃるんですか。（雑誌『大調和』第1巻7号 春秋社 1927年）

【増田訳】あなたは道台（地方の大官）になって、まだエラクないというのですか？（『阿Q正伝』角川文庫 1961年）

【井上訳】お前は結構な道台（おやくめ）さえも捨てたという話じゃないか。それでもお金持じゃないの？（『魯迅全集』改造社 1932年）

【佐藤訳】お前さんは道台（大官）になってみながら、エラクないだつて、（『魯迅選集』岩波文庫 岩波書店 1935年）

【竹内訳】知事様になっても金持ちじゃない。（『魯迅選集』第1巻 作品1 岩波書店 1956年）

【松枝訳】あなたは知事さんになっても、お金持ちじゃないとおっしゃるの。（『阿Q正伝・狂人日記他14篇』旺文文庫 旺文社 1970年）

【高橋訳】あなたは知事様になられて、まだお金持ちじゃないとおっしゃるの？（『世界の文学』第47巻 魯迅 中央公論社 1967年）

2005年、人民文学出版社から出版された最新版の『魯迅全集』の中に、「道台」を以下のように注釈している。

道台：清朝官職道員の俗稱，分總管一個區域行政職務的道員和專掌某一特定職務的道員。前者は省以下，府州以上の行政長官；後者掌管一省特定事務，如督糧道，兵備道等。辛亥革命後，北洋政府也曾沿用此製，改稱道尹。（道台：清朝官員の俗稱である。地域の行政を総管する道員、またはある特定な事務を専管する道員の二種類に分けている。前者は省の下、府や州の上の行政長官であり、後者は省の特定な事務を管掌し、例えば糧道を司り、兵備道を司るなどの官職である。辛亥革命の後、北洋政府もこの制度を使い、道尹に変更した。）

また、『大漢和辞典』によると、「道台」は中国の官僚の古名で、地方長官をいう。清代一省内の糧儲、塩法、郵便、兵備、海関又は巡守等の事務を管理し、各府縣の政務を監察す」とある¹¹⁾。

増田渉と魯迅の直筆注釈メモには、「放了道台」の解釈はそれぞれ「なった」、「大官」である。ここの「放了道台」は紹興方言で、「放」は動詞として、「なる」という意味である。「放了道台」を直訳すると、増田渉注釈メモと同じように、「大官になった」という意味である（図4）。現代中国語では使わないので、中国語に熟達しない日本人に理解しにくい言葉だと考えられる。

11) 『大漢和辞典』修定版（大修館書店 1985）。

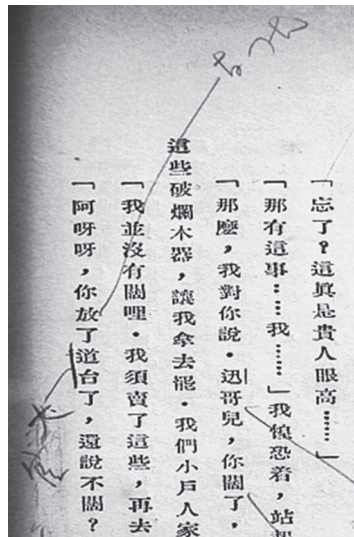


図4

以上の各訳から見ると、訳者不明訳は「放了道台」を「お屋敷をおうりなすつたん」となることは、「道台」を「お屋敷」と誤解したからだと考えられ、動詞の「放」を「うりなす」に翻訳して、それは間違いなく誤訳だと認められる。そして、井上訳は「道台」のまま訳して、訳注「おやくめ」を入れた。しかし、動詞の「放了」を「捨てた」に翻訳したが、原文からはかなりかけ離れており、明らかに誤訳とも言える。井上訳は魯迅から酷評を受けた原因が認められるだろう。

増田訳と佐藤訳はほぼ同じ、「道台」のままを使って、後ろに「地方の大官」、あるいは「大官」という訳注を入れた。増田訳は注釈メモを参考し、魯迅の個人授業で教えられた通りに翻訳していることがわかる。

竹内訳、松枝訳、高橋訳とも「知事」となっている。「知事」という言葉は、元々は寺院の物事を治め司るという意味のサンスクリット「カルマ・ダーナ」を漢訳した言葉に由来する。中国では隋の時代より、主に寺院での住職の名称として用いられている。その後宋代に地方の府、州、県の長官を「知某州事」、「知某県事」などと呼ぶようになり、短縮されて「知県事」「知府事」などと呼ばれるようになった。宋代には正式な中央官制に組み入れられており、中央の官職を持たない県の長官は「県令」と呼ばれた。ちなみに、この「知」と同じ用法としては、知行がある。現在中国で「知事」という官職の名称は既に使わなくなった。日本では、広域自治体である都道府県の首長を都道府県知事（都知事、道知事、府知事、県知事）という。戦前は知事は内務省管轄であり、勅任官であったが、現在は選挙により選出される。「知事」という言葉はまだ日本で使用している。戦後の竹内訳、松枝訳、高橋訳は翻訳の「土着化、本土化」に着目して、日本人の読者が分かりやすく、日常生活で普通に使われる言葉に訳した。選挙制度により選出される「知事」という言葉は当時の日本社会の変化の表現であり、戦後の制度の変化に応じて、竹内訳、松枝訳、高橋訳は「土着化、本土化」の翻訳を採用したのだろう。

しかし、「知事」とは都道府県の首長であって、「道台」は地方長官で、首長に限らないというわけで、「道台」を「知事」と翻訳することはやはり疑問が残る。

「放了道台」は難解な言葉だと言われるが、特に誤訳ではなければ、原作の意志を読者に伝えることに

大きな影響はない。増田訳、佐藤訳のような直訳に訳注を入れる翻訳方法といい、竹内訳、松枝訳、高橋訳のような本土化の翻訳方法といい、訳者の能力や当時の社会状況によって、各訳の特徴が明らかにわかる。

例3：鬆鬆爽爽

【原文】水生却鬆鬆爽爽同他一路出去了。

【訳者不明訳】水生は早速よろこんで宏児と何処かへ駆け出して行った。(雑誌『大調和』第1巻7号 春秋社 1927年)

【増田訳】水生は安心してうれしそうに彼について出て行った。(『阿Q正伝』角川文庫 1961年)

【井上訳】水生は俄に元気づいて一緒になって駆け出して行った。(『魯迅全集』改造社 1932年)

【佐藤訳】水生はいそいそと宏児につれられて出て行った。(『魯迅選集』岩波文庫 岩波書店 1935年)

【竹内訳】水生も元気よく、宏児にともなわれて出て行った。(『魯迅選集』第1巻 作品1 岩波書店 1956年)

【松枝訳】水生はいそいそといっしょに出ていった。(『阿Q正伝・狂人日記 他14篇』旺文文庫 旺文社 1970年)

【高橋訳】水生もあっさり彼といっしょに出ていった。(『世界の文学』第47巻魯迅 中央公論社 1967年)

「鬆鬆爽爽」は、訳者不明訳では「早速よろこんで」、井上訳では「元気づいて」、佐藤訳と松枝訳では「いそいそと」、竹内訳では「元気よく」となっている。5者とも水生の喜んでいる気分を強調し、嬉しさに心が浮き立つ様子を表現するように翻訳している。高橋訳では「あっさり」となって、簡単に、しつこくないというような水生の行動を表現しようとしている。しかし、増田は、「鬆鬆爽爽」を「安心してうれしそうに」と訳し、「嬉しい」だけではなく、「安心」という気持ちも入れて、他の各訳と少し異なる訳を採用している。

「鬆鬆爽爽」は中国語で確かに「気楽」および「愉快」という2つの意味がある。原文の前後の内容を関連させて考えてみると、「私」は20年ぶりに故郷に帰って、閩土と再会した時に、閩土は自分の5番目の子供である「水生」のことを「私」に紹介した。「水生」ははじめて「私」と会って、恥ずかしがり屋だから、ちょっと怖がっているように閩土の後ろにしがみついて挨拶もできない。「私」の母親は「水生」の様子を見て、彼とほぼ同い年の「私」の子供「宏児」を呼んで、「水生」を連れて遊んであげなさいと言った。そして、「鬆鬆爽爽」はその話を聞いた「宏児」について一緒に外へ遊びに行った時の「水生」の気持ちである。原作を読んでもわかるように、子供である「水生」は最初から知らない人ばかりの環境にいるので、恥ずかしがって不安な気持ちから、同い年の「宏児」と一緒に不安な環境から離れて遊びに行くことができ、安心して嬉しくなる気持ちに変化した。「鬆鬆爽爽」という言葉は、実は複雑な意味を持っており、理解しにくい表現であろう。

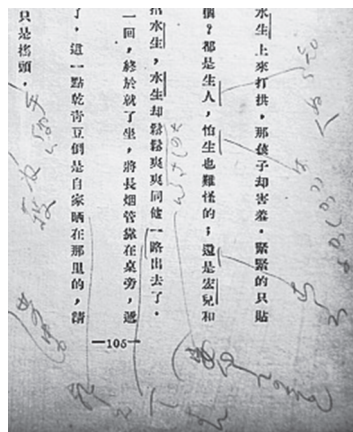


図5

図5のように、増田渉と魯迅の直筆メモからみると、増田は「鬆鬆爽爽」の隣に「たのしさに 安心してごとし」と書いて解釈している。魯迅の個人講義を受けた際に、増田は直接に魯迅の自書の文脈の説明を受けた。魯迅が「鬆鬆爽爽」は「嬉しい」と「安心」2つの意味があることを強調していたのではないと思われる。そのため、ここの「鬆鬆爽爽」の翻訳は「安心」という意味も入れたほうがより適切だと考えられるだろう。

日本人でありながら増田は原作の内容をきちんと理解した上で、他の各訳より正しく翻訳できた。「鬆鬆爽爽」という言葉について、増田訳は作者の意志と原作の内容をよりの確に読者に伝えられるのだろう。

おわりに

翻訳ということは、あまり誤訳がなければ、分かりやすいかどうかだけで良し悪しが決まるものではない。翻訳作品は、訳者の語学力、母国語力、それに文学作品に対する感受性や理解力の多方面の能力、さらに訳者が置かれている時代と社会環境によって出来上がったもので、原作を尊重しながら、読者が読みやすいためある程度本土化した作品である。訳者がこだわりを見せる言葉や表現を探し、その言葉や表現にこだわるのはなぜなのか、ということを追究していかなければならない。当然、与える印象も訳者によって全く別のものになる。ある翻訳作品を読む際に、どういう目的で書いたのかを知っているのは原作者だけで、読者はどう読み取るかは訳者次第である。だからこそ、魯迅作品の日本語訳の改善についての議論や検討、増田渉が魯迅の個人講義を受けた際に残っている直筆注釈メモの存在は非常に意義がある。原作者の意志を訳者に直接に伝えたこの直筆注釈メモは、原作者と読者を繋ぐことができる橋になっている。

この直筆注釈メモを参考した増田訳は、原作者である魯迅の意志に一番近く、誤訳もないと考えられる。訳者不明訳は誤訳があり、最初の訳本であることが原因かもしれない。井上訳の誤訳が多くて、魯迅から酷評を受ける原因も明らかになった。松枝訳と高橋訳は日本人の読者にとって、理解しやすい訳本であるかもしれないが、魯迅の意志とは離れているところがあると考えられる。竹内訳は「故郷」の

「定番訳」として見られており、日本の国語教科書に使われてきた。ただし、増田渉と魯迅の直筆注釈メモを参考し、原作者である魯迅の意志を考えると、竹内訳には疑問点がいくつかある。疑問のある部分を訂正して、「定番訳」を扱う際に訳文をもう一度検討すべきであろう。

